

ゲーテ及びシラーのカント觀についての一考察

小林 保 太 郎

カル・マルクスの名を耳にするとわれ／＼は先づ經濟學者としての彼を思ひ起すが、同時に彼が自ら詩も書き又文芸批評家としても名をなしてゐたことは広く知られてゐる處である。そのマルクスがゲーテとシラーのカントに対する立場について一八四七年ドイツの或る新聞に次のやうな興味ある論説を寄せてゐる。

「ゲーテは彼の時代のドイツの社会に對して二様の行き方をしてゐる。即ち或る時は之を敵視し、インフィデリーニに於けるやうに又イタリア旅行中のやうに此の不快な世界から逃避しようとし、或はゲッツ、プロメーティス、ファウストとして社会に叛旗を翻へし、或はメフィストフェレスとして、之に痛烈な皮肉を浴せかけてゐる。ところが或る時は此の反對に社会に對して親しみを持ち、シラーと共同で出したクセーニエン（諷詩）中の大多數の詩や数多くの散文中に見られるやうに、社会に順応し、殊にフランス革命について書いてゐる悉ゆる文章に於ては迫りつゝある歴史的運動に逆つて現実の社会を強く擁護してゐる。つまりゲーテの中には常に相反する二つのものが争つてゐた。その一つは周囲の「みぢめさ」に對して嫌惡の情を抱く

天才詩人の彼であり、他はその「みぢめさ」も亦已むなしとし、之と手を握り之に順応しようとするフランクフルト市の名士の息、ワイマール國の大臣たる彼である。従つてゲーテは時には偉大になり、時には弱少になり、時には世に反抗し世を嘲笑する天才ともなれば、又時には遠慮深い満足した狭量な俗物ともなるのである。更にゲーテは所謂「ドイツのみぢめさ」(Deutsche Misere)を克服することは出来なかつた。逆に「みぢめさ」の方がゲーテに打ち克つた。そしてドイツ最大の人物たる彼さへ之に敗れたといふことは、此の「みぢめさ」なるものが『内部』からは決して克服出来ないことを最もよく証明するものである。ゲーテは又余りにも普遍的であり積極的性質を有し且つ情熱的であつたから、シラーのやうにカント哲学に逃避して現実のみぢめさから身を救はうとすることなどは出来なかつた。寧ろゲーテは鋭い洞察力を持つてゐたから、此の哲学への逃避は唯現実のみぢめさを一層深刻にするものに他ならないことを見抜いてゐた。ゲーテの氣質、エネルギー、精神的傾向はいづれも実生活に向いてゐた。そして彼の直

面した実生活は実にみぢめなものであつた。自分が輕蔑せざるを得ない生活圈内にあるといふディレンマ、しかも此の生活圏が彼の活躍し得る唯一の舞台であるといふディレンマの中にゲーテは絶えず置かれてゐた。そして歳を取るにつれて此の偉大な詩人は、下らないワイマール国の大臣の仕事に慙々身を入れて行つたのである。われ／＼はベルネ^{註1}やメンツェルの様に、ゲーテをリベラリストでないと非難するものでは決してないが、彼が時に俗物であつたことは認めなければならぬ。また彼がドイツの自由のために情熱がなかつたと攻撃しようとは思はないが、併し一ナポレオンがドイツの積年の宿弊を一挙にして革めてしまつたのに反し、ゲーテが小さなドイツの更に又小さなワイマール国の下らぬ些事と一生懸命取組んでゐたことを指摘しなければならぬ。」

以上のマルクスの文はカル・グリューン^{註3}が書いたゲーテに関する著書に反駁を加へたものの一節である。従つて内容が鬨争的であるのは已むを得ないとしても、ゲーテに対して少しく辛辣過ぎる観がある。例へばマルクスは、ゲーテが歳を取るにつれて慙々下らないワイマール国の大臣の仕事に身を入れて行つたと非難してゐるが、事實は之と大いに異なつてゐる。現にゲーテは一八一七年国主カル・アウグスト大公と二度目の大衝突を来して以来は事實上殆んど總ての官職から離れて創作に専念した。即ち名詩マリーエンバート悲歌は一八二三年（七四歳の時）に、小説ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代の第一巻は一八二一年に、第二巻、第三巻は一八二九年に書き上げられ、畢生の大作ファウストの

二部が完成したのは一八三一年七月、実に彼の亡くなる僅か八月前であつたことを取上げてみてもマルクスの言が當を得てゐないことが分る。

（尤もマルクスによれば書き上げられたファウストはゲーテのブルジョア生活のために歪められたものであつて、寧ろファウスト稿本（Urtext）の方が勝れてゐると言ふのであるが、此処に至つては最早見解の相違といふ以外に言葉はない。）

それにも拘らず此のマルクスの文を冒頭に永々と引用した理由は、之が必要以上にゲーテに攻撃を加へてゐる缺點はあるにせよ、在来のゲーテ観に対して頂門の一針を為してゐること、非常に短くではあるがゲーテとシラーのカント観に鋭く触れてゐることによるものである。

偕ゲーテとシラーの哲学に対する態度を比較してみると殆んど対照的と言つてもいゝ位に異なつてゐる。

その第一の理由は、ゲーテが法律といふ精神科学から出發して次第に自然に近づいて行つたのに反し、シラーは医学といふ自然科学から出發して次第に精神界に近づいて行つたことにある。

第二の理由は両者の社会的環境の差異にある。即ちゲーテが終始恵まれた環境にあつたのと異なり、シラーは幼少の時から非常に辛酸を嘗めてきた。此の違いが当然両者の哲学観に対しても大きな影響を及ぼしてゐる。

第三に両者の精神的傾向が根本的に異なる。

ゲーテはその伝記的略述の中で

「性格と本性が全く私とは反対であつたシラーと私は多年中絶

することなく交つた。そしてわれ／＼は相互に強い感化を及ぼしたので二人の意見が一致しない場合でも了解出来るやうになつた。」

と書いてゐる。シラーも亦此の問題について、ゲーテは直観的であるのに反して自分は思索的であると言ひ、更に「ゲーテは個体から観念に上つて行く。然るに自分の場合には観念が先づあつてそれから個体に下つてくる。」

と述べてゐる。

ところでゲーテの直観的精神は、こと哲学に関する限り、シラーの思索的精神に比して劣るものと言はなければならぬ。ゲーテ自身も

「本当の意味の哲学に関しては自分は素質がない。」と告白し、又^{註4}エッケルマンに向つて

「私自身はいつも哲学には捕はれなかつた。健全な常識の立場は又私の立場でもあつた。」

と語つてゐる。

更に「詩と真実」の中では、「哲学は宗教や文学の中に含まれてゐるから、特に哲学だけを引き離れたものは不必要だ、」と述べてゐる。

^{註5}メーリングはゲーテの哲学観に対して

「ゲーテはスピノザに対してだけは相当深い理解を持つてゐた。しかしそれも唯スピノザの根本思想、即ち「あらゆる実在するものの統一、一切の現象の合理性、精神と自然の不変性」といふことに就いてのみで一般にスピノザの著作を認めようとはしな

かつた。カントの哲学に至つては根本思想さへゲーテを惹きつけなかつた。丁重に之を敬遠するのはいゝ方で、烈しく非難する方が寧ろ多かつた。」

と酷評してゐるが、之もマルクスのゲーテ批評同様少しく行き過ぎである。

尤もゲーテ自身カントを研究して「純粹理性批判」は全く自分の領域外にあることを告白してゐる。

併しその反面友人の作曲家^{註6}ツェルターに宛てた手紙の中では「カントが芸術と自然とを並べて、目的なしに活動する權利を此の両者に与へたことは、世界全体からみても、自分一個からみても、カントの偉大な功績だ。」

と賞讃した。

又「フランス従軍記」の中では「判断力批判」に言及し、その結論として、カントが「芸術と自然が自己のために存在することを指摘した」のを賞め讃へてゐる。

更にエッケルマンとの対話の中で

「カントは疑ひもなく最も勝れてゐる。彼は又その教が絶えず影響を与へて、我がドイツ文化の中に最も深く滲みこんでゐる人の一人である。彼は君がその著書を読まなくても君に影響してゐる。」

と語つてゐる。

併しカントは、本来芸術家として生れついてゐるゲーテとは根本的に相容れないものがあるので、シラーはゲーテにカント研究を止めるように忠告した。それにも拘らずゲーテは「カントを研

究して大いに得る処があつた。」

と言つてゐるが、之はジーベックも指摘してゐるやうに、ゲーテはカントとの一致を誇張し過ぎた観がある。

現にゲーテ自身

「主観を極めて高く昂揚し、その中に局限されてゐるやうに思はれるカント哲学をシラーは喜んで摂取した。」

と言ふ言葉をも他の処では吐いてゐるのである。

結局カント哲学はゲーテに対しては重要な役割は演じなかつた。寧ろゲーテに取つては油の中に落された一滴の水に他ならなかつた。

畢竟ゲーテはカントから——之はスピノザについても同じ事が言へると思ふのであるが——唯自分と調和出来るものだけを取り入れたのに過ぎないと言へよう。

これに反してシラーに取つては哲学、殊にカント哲学は絶対に缺くことの出来ないものである。マルクスは「シラーがカント哲学に逃避した。」と言つたが、決して逃避したのではなく、反対にこれを熱情的に把握し、自己の芸術に新生命を吹きこむと共にドイツ社会に積極的に貢献したのである。尤もシラーが現実の世界よりも思想の世界を選んだのは事実であつて、これは彼の境遇が然らしめたのだ。ゲーテと違つて実生活に不遇であつたシラーの眼に、思想の世界の方が遙に自由に且つ美しく映じたのは当然と言はねばならぬ。

故にシラーは先づ思想の世界を征服し、之によつて現実の世界をも征服しようとしたのである。従つて彼は人間を以て自然を支

配するものとみたカント哲学に走つたのだ。

之に反してゲーテは自然を母として崇拜し、自分と自然とを一つと見た。此の一致観からゲーテは彼の哲学と幸福とを見出したのである。

文学的に見ればゲーテは「田園詩」を基としシラーは「諷詩」から発してゐる。ゲーテはその理想を現実の中に再び見出し、シラーは現実を理性で量つてその小さ過ぎることに氣づく。現実、感覚界、普通平凡なもの、日常生活等をゲーテは卑俗と呼んだ。

シラーは此の卑俗から脱却して向上しようとし之を果したのである。シラーの青年期の作品は諷刺的である。諷刺家の派手な能辨な遣り方で大膽な言葉、強いコントラスト、誇張を豊富に用ひて抑揚格(Trochäus)の華美な詩の中で青年シラーは、墓と死、戦争と殺戮、疫病と地獄、愛の陶醉と友情の感激、音楽の力と不滅の世界を描いた。雄大な描写によつてシラーは崇高なものを画き出さうと試みたのである。

或る意味ではシラーはカントを知る前からカント学派だつたとも言へる。何故なら生活苦に悩まされた詩人の、苦しい人生に対する憤懣が彼の青年期のドラマ——群盜 Räuber——に現はれてゐる一方、同時代のいくつかの詩の中には、前述した諷刺や華美的形式の他に、思索的傾向が見られるからだ。即ち未だ非常に曖昧にはあるが、兎に角カントの觀念の世界の段階があらはれてゐる。彼の初期の詩「道学者に寄す」(An einen Moralisten)に於ては、感覚界が道德律の冷厳さに対して叛旗を翻へしてゐる

が、反対に「諦念」(Resignation)の中では道徳律が勝利を収めてゐる。

斯様にシラーの思想は初め不安定であつたがやがて解放と浄化の時期が来た。即ちカント哲学の影響により大きな啓示として「一般人類愛」が彼の心に浮んだのだ。忍耐と和解！彼は愛情の概念の上に自己の哲学を築き上げた。非利己的な愛情への信念なくしては神、不朽、徳に対する希望はない。愛情はわれ／＼を神の高さに導く梯子である。友人のための死、人道のための死は愛情の最高の行為であると当時のシラーは表現してゐる。

即ち最初には諷刺的自然主義があらはれてゐたのに反して次の時期には素材を高尙化し、個人的地方的なものを一般普遍的なものに迄高め、自己の魂の中の完全な理想を表現しようとした。換言すればシラーの思想はカント哲学により安定せしめられたのであるが、同時にかの「ドイツのみぢめさ」との闘争に疲れはてて望みを失つた「群盗」の詩人も亦、同じ哲学の中に満足を見出したのである。

シラーは哲学者としては勿論カントに遠く及ばないが、此の大哲学者を彼なりに正しく理解するだけの「積極的性質」は十分に持つてゐた。

大体シラーがカントを研究し始めたのは一七八七年頃で、その動機は友人ケルナー^{註8}の勧めによるものであるが、一七九一年の大病から恢復して以来本格的の研究に着手し、三年の歳月を経て漸く結論に到達した。即ち「灰色の理論は結局一種のカリカチュアに過ぎず、詩人の仕事はそれ以上のものだ。」と断定するに至つた

のである。そしてその最初の収穫として一七九三年雑誌「タールニア」に「優美と品位について」と「崇高なるものについて」の二論文が発表された。シラーはカントの義務観念が余りに嚴格に過ぎて人間味を缺くのを不満に思つて、人間の教養に美的文化、即ち芸術の作用を利用することによつてこれを緩和しようとしてゐる。と言つてもシラーは美学的なものと道徳的なものを混同しようとする者では決してない。然し此の両者には共同の根がある。それは即ち「意志の自由」である。「意志の自由」のない処には道徳の責任は生じない。ところが「美」の方には意志の自由に基かぬ美のあることを彼は認めざるを得なかつた。例へば美人は何等意志を用ひずして生れつき美人である。何故ならその美を創り出したのは「自然」だからだ。シラーは之を「構成美」と名づけた。即ち物体が構成せられる仕方によつて生じたからに他ならない。然るにこれに対して「優美」や「品位」としてあらはれる「美」は修養に基くものである。前者は喜びの中に達せられ、後者は忍苦の中に達せられる。シラーは後者を眞の「美」として「構成美」の上に置いた。又彼は之を人の才能にも適用して、天才(Genie)を「構成美」に比し、これは単なる天恵とし、修養努力による能才(Talent)は功績であつて、「眞の美」に相当するとした。

シラーが美学的なものと道徳的なものとを厳に區別してゐることを明らかにするために、更に前述の彼の論文「崇高なるものについて」の一節を引用してみよう。その中でシラーは、作家に「国家的対象物」をテーマとして推薦することは「野蛮な趣味」

であると述べてゐる。曰く

「美的作品中に道徳的な目的を要求することは明らかに限度を超えた過失である。理性の世界を拡充するために想像力をその当然の領域から追放してしまふことも亦然りである。」

「美的觀察の対象は内容ではなくして形式である。」

といふカントの命題は、シラーにあつては次の簡明な解釈に現はされてゐる。

「素材 (Stoff) を形式によつて消化し尽してしまふところに大家の大家たる芸術の神髓があるのだ。」

一般にシラーの美学論文は必らずしもカントの哲學的深さに達してゐないとは言へ、シラーにあつては純美學的判断がカントより一層豊富で且つ鋭敏であることが少くない。之はシラーが詩人であつたからである。そしてレッシングでさへも「政府は芸術に於ける一切の低劣卑俗なものを圧迫すべきである。」といふ考へを常に抱いてゐたにも拘らず、シラーは芸術の中に低劣卑俗なものがあつてもいいといふ考へであつた。勿論シラーも

「グロテスクなものや低劣なもの、趣味の限界とも言ふべききわどいものを材料として用ひる場合には、非常に注意して高い芸術的目的により之を是正しなければならない。しかしそのために哀れな人間をあまり輕蔑してはならぬ。『不潔物は不潔物のために芸術的表現が必要だ。』といふ偉大な発見は、われ／＼の輝く世紀に至つて漸く為されたのだ。」と述べてゐる。

借此處でシラーのカントとの関連に再び立ち返つてみると、カントの「自然界」からシラーは「自然國家」をつくつた。——勿

論當時の封建的獨裁國家の實狀を十分に承知の上で——またカントの「人間の意志の自由の世界」からは「眞の政治的自由の建設」を行ひ、更にカントが「自然界」と「自由の世界」を結ぶ絆として「芸術界」をつくつたやうに、シラーは「自然國家」から「美學文化」の橋を超えて「市民の理性國家」に到達しようとしたのである。

シラーのカント觀はその美學論文中に最もよく現はれてゐる。次にその一、二の例を挙げてみよう。

「素朴な文學と感傷的な文學について」といふ論文中に曰く

「素朴な詩人は自然の恵みを受けて常に分裂を知らぬ統一として働らき、如何なる瞬間に於ても獨立の完成した全体であり、人間をその完全な内容上から現實の裡に表現してきた。感傷的な詩人は抽象によつて失はれた統一を自分自身の内部から再び創り上げ、人間を自己の内部に於て完全にし、局限された狀態から無限の狀態へ移行行く能力を自然から享け、又は活潑な衝動を授けられてきた。此の二つの感じ方はその最高の概念に於て考へてみると、丁度カントの第一範疇と第三範疇の如き關係にある。素朴な感情の反對物は即ち反省的悟性であつて、感傷的な気分といふものは、反省の諸條件の下にあつても内容上から素朴な感情を再び創り出さうとする努力の結果である。そして自然と自然に相應する素朴な気分とは常に第一範疇に、自由に活動する悟性による自然の揚棄としての人爲は常に第二範疇に、完成した人爲が自然に還り行く理想は第三範疇に相應するであらう。」(高橋義孝氏訳より)

そしてゲーテは素朴な詩人であり、之に反してシラーは自分自らを感傷的と呼んでゐる。

素朴な詩人は自然そのものであり、感傷的詩人は自然を求め、前者は自然を描写し、後者は理想を表現する。前者は安定し、後者は活動する。前者は實際生活に喜びを与へ、後者は實際生活に對しわれ／＼を失望させる。

即ち素朴詩人は現実主義者であり、感傷詩人は理想主義者である。此の一事を以てしてもゲーテとシラーのコントラ観が根本的に異なる理由が領けるであらう。

更に「優美と品位について」の中で次の如く述べてゐる。

「嗜好の対象となり得るためには、理性への服従が、愉悦の根拠とならねばならぬ。何故なら、唯快感と苦痛によつてのみ本能は動かされるからである。普通の経験では之は逆であつて、人が理性的に行動する根拠は愉悦なのである。道徳自身がかゝる言ひ方をしなくなつたのは、かの『批判哲学』の著者——カント——の賜物である。哲学する理性から健全な理性を再び作り出したといふ榮譽は、当然彼に帰すべきである。」（新関良三氏訳より）併し次に彼は、カントの道徳哲学の中では義務の概念が非常に峻厳に説いてあるので、「典雅」が恐れて引き下り、弱い「悟性」も亦「陰鬱な僧侶的な禁慾の道」に閉ぢこもつて道徳的に完全にならうと努める程だ、と論じてゐる。

前述したやうにシラーが人間の教養に美的文化を取入れるに至つた根拠は即ち此処にあるのだ。

シラーの美学論文中最も重要なものは「人間の美的教育に關す

る書翰」である。彼は之を書き始めた時に、ゲーテに宛てて次のやうな手紙を送つてゐる。

『私は未だ政治的悩みについては筆を染めたことがありません。私が此の美的教育に關する書翰中で政治について述べてゐるのは、二度と再びこれに触れたくないからに過ぎないのです。』事實シラーに取つては『政治的悩み』は美の理想に跳躍するための跳躍板に過ぎなかつたのである。

彼は此の二十七に及ぶ書翰の形式の論文中、自己の主張の根拠がカントの原理に基くことを先づ冒頭に明記し、ついでフランス革命を批判し、当時のドイツ社会の腐敗を鋭く衝き、更に人間の美的教育の要を縷々論じてゐる。そして、政治問題を解決するためには美学的問題による道を進まなければならぬこと、自由への道は美を通つて通じてゐることをその結論として得たのである。

而してシラーは自分の根本思想を次の文に現はさうと試みてゐる。

「人間はその肉体的状態に於ては唯自然の力を忍ぶだけに止まる。美的状態に於ては自然の力を脱却し、道徳的状态に於ては此の力を征服する。」

美学書翰は最終目的として『美的国家』を挙げてゐる。曰く「美的国家に於ては一切が——使役の道具までが、最も高貴なるものと同等の權利を有する自由な国民であり、忍従する大衆を自分の目的の下へ無理矢理に屈せしめる知性は、こゝでは大衆にその賛同を求めやらねばならない。」

かくして此処では、美的仮相の国では、平等の理想が実現される。此の理想は、熱狂者達がその本質上からも現実化されてゐると思ふべきであらうか？欲求から言へば、それは悉ゆる精良なる情調の魂の中に存在する、實際からいへば、吾人はそれを唯純粹なる教会と純粹なる共和国と同じに、二、三少数の選み抜かれた圈の中のみ見出すかもしれない。其処では他の風習の精神なき模倣ではなく、固有の美しい天性が、程度を指導して居り、其処では、人間はこの上なく紛糾した事情の間を、大胆な單純さと落着いた無邪氣さとを以て歩み、そして自分の自由を主張せんがために他人の自由を傷ける必要もなく、また優美を示さんがために己れの威嚴を捨て去る必要もない。」（新関良三氏訳より）

かくてシラーはカントの理想に戻つてくる。そして「制限する現実」と勇敢に闘ひ乍ら又カントの思索に味方し乍ら、文学の世界へ突き進んで行くのである。

次にシラーの美学書翰と最も密接な關係を有してゐるのは彼の哲學的詩、即ち思想詩である。之等の詩の中でシラーは『肉体の幸福と精神の満足』との間の永遠の闘争を救ふ唯一のものとして美学を挙げてゐるのである。

此の種の詩人としてはシラーの右に出る者はなく、「世界文学中シラー程優れた思想詩をつくつた者はない。」とシエラーも^{註9} 激賞してゐる。

之等思想詩の主なるものは一七九五年からその翌年にかけてつくられたのであつて、此処では彼は哲學的思考の鈍重さをかなり捨て、彼の美学的哲學的論文の本質的な思想を、輕快な詩と美の世界に救ひ上げてゐる。

数多くのシラーの思想詩中最も優れて居り且つ大作と言ふべきは「散步」(Der Spaziergang)及び「鐘の歌」(Das Lied von der Glocke)である。「散步」の構想は実に雄大で一篇の詩であり乍ら人類の文化史の概観をなしてゐる。哲學と文學、思考と詩作とをこれ程によく融合させることに成功した作品は他にはない。「鐘の歌」は、シラーの詩の最後の大作であつて、鐘が鑄造せられる過程の叙述と並行して人間の一生を叙し、終には社會問題にまで言及してゐる。此の詩に於ても彼は、社會秩序の尊重すべきことを述べ、かの平和市民が武器を執つて街道に横行し、善が悪に押しのけられ、犯罪が公に許され、人間の殘忍性を狂ふまゝにする革命を呪咀してゐる。之を要するにシラーの思想詩の根本を為すものは矢張カントの道德律であると言はなければならぬ。

此処で再びゲーテとシラーの相違を吟味しつゝ結論的に彼等のカント觀を検討したいと思ふ。

ゲーテは觀察により知識を弘め、シラーは思索して概念の世界に親しんだ。ゲーテが自然と芸術の世界を見渡してこれから美しい詩の新しい着想を得れば、シラーは歴史と哲學を研究してこれから新しい美学を創造した。

カントの哲學はシラーを力強く把握し、彼を刺戟し發達させた。多くの失望と困窮を伴ふ苦惱に満ちた世界を、彼は耐へ忍ぶ

ことを知つたばかりでなく、高潮された英雄主義と一種の禁慾苦行を以て一切の地上の苦悩から超越し、芸術の奥深く躍りこんだ。自分の持てない幸福——例へばゲーテの持つやうな——をシラーは嫉妬せずに観察した。そしてシラーは自己の生活の斯様な境遇から自己の哲学を醸成して行つたのである。感覚界と現実とを彼は非常に低く見た。それだけ世を動かす芸術を高く見たのである。カントにあつては総ての「善」「偉大なるもの」と同様に「美」は現世を超越したものである。しかしカントが趣味との抗争によつて為されるものだけを善として認めようとしたのに反して、シラーは義務と趣味が一致し、非感覺世界と感覺世界が調和するやうな人間の状態を讀へてゐる。

彼によれば此の状態を齎らすものが即ち芸術なのだ。

ゲーテを自然と芸術が実らせたやうに歴史と哲学がシラーを実らせた。彼を安定させたカント哲学は、彼が人間の進歩を観察する手段となつたのである。

再び言ふ、ゲーテは結局カントと相容れなかつた。(彼は哲学的にはスピノザに最も近く又ライプニッツの影響も少なからず受けてゐるが之等については又述べる機会もあらう。)

之に反し、シラーはカントに傾倒し、カント哲学から得る処は多かつたが、しかも之に圧倒される処はなかつた。シラーの強大な自力と個性は、ゲーテに対すると同様、カントに対しても護るべき自己を護り通したのである。

註1 ベルネ Ludwig Börne 1786—1837 革命的評論家、フ

ランス自由思想の信奉者、三〇年七月革命以後パリに移住「パリ便り」の他多くの文学批評、紀行等がある。

2 メンツェル Wolfgang Menzel 1798—1873 政治評論家、初め急進的だつたが後反動化し極端な排外主義を鼓吹した。ゲーテ嫌ひとして有名、「ドイツの文学」等の著書がある。

3 カル・グリューン Karl Grün 1817—1887 作家、「人間としてのシラー」「十六、七世紀の文化史」等の著者。

4 エッケルマン Johann Peter Eckermann 1792—1854 ゲーテ晩年の秘書、有名な「エッケルマンとの対話」の著者。

5 メーリング Franz Mehring 1846—1919 ドイツ社会民主党領袖、マルクス主義的歴史学や文学史の開拓者、「レッシング傳説」を始め多くの文学的論文がある。

6 ツェルター Karl Friedrich Zelter 1758—1832 作曲家、ゲーテの友人、ゲーテやシラーの詩を多数作曲した。

7 ジーベック Hermann Siebeck 1842—1920 新カント派哲学者、ギーセン大学教授、「思想家としてのゲーテ」を始め多くの哲学的著作がある。

8 ケルナー Theodor Körner 1791—1813 戦争詩及び自由詩の情熱詩人として有名、シラーの崇拜者、自由戦争に志願兵として加はり戦死、詩集「琴と剣」。

9 シェーラー Wilhelm Scherer 1841—1886 有名な「ドイツ文学史」の著者、文学史研究に一新紀元を劃した。

参考文献

Franz Mehring : Ästhetische Streifzüge

Wilhelm Scherer : Geschichte der deutschen Literatur

山岸 光 宣

ゲーテ

新 関 良 三 他

シラー選集（論文集）

鼓 常 良

ドイツ文学史